

## 農学部 の 44 年 間

図 師 静 雄

昭和24年4月30日付で農学部蚕糸学科に採用されて以来、一貫して学部の農業生産に関わる教育現場に勤務してきた。早いもので44年間の経過したが、その間の社会的な変化は目まぐるしいものであった。その波から大学も無縁ではなく、昭和38年、蚕糸学科廃止、昭和44年園芸学科新設という学部改組の動きの中で、勤務は昭和43年7月付で蚕糸学科桑園から附属農場唐湊果樹園に移動した。

蚕糸学科での業務は、専ら蚕の飼育と桑園の管理（刈り込み、整枝や萎縮病株の抜根など）およびそれらに関する学生実習補助であったが、桑園管理では馬耕が中心であった。就職当時の桑園の面積は、校内農場として156 a があったが、大学の統合計画により、文理学部建設用地（現在の理学部あたり）となったため、昭和28年から新桑園が計画され、農学部敷地内に80 a が設けられた。しかし、昭和31年には、その内現在の林学科苗圃にあたる50 a の桑園を専売公社の煙害のため廃止して、代替地として旧繭検定所跡地（現在の教育学部体育館敷地）に50 a が造成された。これらの桑園の造成では、いずれも50 a 分におよぶ表土を馬車で新造成地に運び、客土するなど短期間の間に大きな苦勞があった。

養蚕学講座の教授は、西郷先生であったが、昭和24年当時の桑園の担当教官は、黒川助手で若い先生であった。それ以後、直接接した教官を振り返ってみると、昭和25年から福永先生、昭和28年から南先生、昭和30年馬場先生、そして昭和31年から林先生であった。また、昭和25年まで白沢補手があり、技官は森田氏、梶原氏と図師の三人であった。当時の蚕糸学科では養蚕関係の講義が主であったが、繊維加工学講座の中に繊維作物学が含まれており、稲留先生の担当で丸蘭、シチトウ蘭などを原料に加工が行われていたことが特色の一つであったように思われる。

蚕糸学科で19年間勤務したが、その間、宿直の夜に養蚕室で火災が発生して大変であったこと、学生が桑摘みの帰りに農場の馬鈴薯を無断で掘り、農事部の技官から怒られたことなどが、戦後の時代背景とともになつかしく思い出される。

農場に配置転換になった当時、農場長は宮司先生、主事は小山田先生であった。赴任当初の唐湊果樹園での業務は、柑橘園の草払いや管理が中心であった。しかし昭和43年の台風による塩害で、柑橘園の6割におよぶ株が枯れ、苗の補植と防風垣の整備に追われた。それを契機にして、おもにスギ、ヒノキなどの防風垣樹の挿し木作業に従事したが、ブルーベリー導入にともないその管理も行うようになった。さらに、図師ヒサ技官の定年退職のあとを受け、花き花木の専任担当となり、防風垣樹、生垣樹の生産管理、ブルーベリーの管理とその栽培に関する各種研究の補佐に加えて、

植木、花木鉢物の生産管理および有用植物類の収集と生産管理を担当してきた。

唐湊果樹園での在勤年数は25年目になった。その間、熊本、福岡のブルーベリー農家への栽培指導や研修をしたこと、大学構内や民間に植木、花木類栽培の実地指導をしたこと、遺伝子源確保のため建設された温室での植物管理、標本樹へのラベル入れ、ブルーベリーの各種試験の手伝いおよび実習での学生とのふれ合いなど思い出深い出来事も多い。

蚕糸学科から通算して、3月末で44年間を大学で過ごしたことになる。好きな植物と関わりを持ち、楽しく仕事が続けられたことは幸せであった。ここに農場をはじめ農学部の教職員各位に感謝の意を表したい。